

千葉県公立高校入試の動向

「千葉県公立高校入試 / 令和3年度入試の概要」

株式会社 総進図書 岡山 栄一 氏

千葉県公立高校入試/令和3年度入試の概要

(株) 総進図書

岡山 栄一

公立入試の一本化、公立離れに拍車をかける！ 約2,000名の二次募集！！

千葉県の公立高等学校の入試は、今年度大きな変動を迎えました。永らく続いていた、推薦・一般入試、特色化・一般入試、前期・後期選抜といった2回受検が一本化され、1回受検の入試となりました。近年叫ばれていた入試の一本化がようやく実現したわけですが、入試の状況等に及ぼした影響は、非常に大きいものとなったと言えます。まずは、新しい入試制度の仕組みを見ていきたいと思います。

新しい入試制度のメインとなる選抜は、「一般入学者選抜」です。一般入学者選抜は、「本検査」と、インフルエンザ罹患等によるやむを得ない理由で受験できなかった生徒を対象とした「追検査」で構成されています。選抜の結果発表については、本検査、追検査が別々にされるのではなく、一括して発表がされるしくみです。本検査は、2月下旬の2日間で実施され、第1日目に国語・数学・英語の学力検査、2日目に理科・社会の学力検査と学校設定検査（面接・作文・自己表現等、高校が独自に実施する検査）が課せられます。学力検査のうち、英語のみ今年度より60分の試験時間となりました。60分への変更により、問題構成の変更や問題量の増加が予想されましたが、結果的には昨年度とほぼ変わらない構成内容でした。時間が延びた分だけ、生徒にとってはかなり余裕が生じたと思われます。追検査は本検査が実施された

令和3年度 一般入学者選抜の日程	
入学願書等提出	令和3年 2月9日(火)・10日(水)・12日(木)
志願又は希望の変更	2月17日(水)・18日(木)
本検査の実施	2月24日(水)・25日(木)
追検査の受付	2月26日(金)・3月1日(月)
追検査の実施	3月3日(水)
合格者の発表	3月5日(金)

後の別日程の1日で実施され、5教科又は国数英の3教科の学力検査が本検査とは別の問題で課せられます。試験時間は、本検査と同じく、英語が60分で、他の教科は各50分です。学校設定検査は、学校裁量で実施されます。インフルエンザ等の対策という主旨ですから、本年度の受検者は9名と非常に少ない検査となりました。したがって、本章の言及は、本検査を中心に進めていきたいと思います。

本検査の検査内容	
第1日 2月24日(水)	学力検査 国語・数学 (各50分) 英語 (60分)
第2日 2月25日(木)	学力検査 理科・社会 (各50分) 学校設定検査

次に、一般入学者選抜の「選抜方法」について見ていきたいと思います。合否を判定する際に評価する資料は、①学力検査の結果、②調査書中の3年間の9教科評定合計値、③調査書中の学習関連以外の記載事項（生徒会活動・部活動・資格等）、④学校設定検査の結果、の4つの資料です。それぞれが数値（点数）化され、各資料の点数を合計した総合点によって合否が決まるしくみです。個々の資料の配点には決められたルールがありますが、その範囲内で各学校が個々の資料の配点を決めることができます。つまり、どの資料に大きな配点をつけるか、生徒のこういった面に重点を置いて合否を決めるかは、各学校に任せられており、その評価資料の配点等は、全て各学校のホームページで公表されるようになっています。また、「学校の特色を重視した選抜方法」を取り入れた、2段階による選抜方法もとることもでき、より生徒を多面的に評価する選抜方法となっています。この2段階選抜を実施した学校は、令和3年度入試では13校14学科のみでしたが、志願者数が定員を満たさない学校も多く、来年度以降増加していくかどうかは、予想しにくい面もあるかと思っています。それでは、このような新しい入試制度の下、令和3年度入試がどのように実施されたか、また、どのような入試状況であったのかを見ていきたいと思います。

令和3年度の一般入学者選抜は、本検査2月24日(水)・25日(木)、追検査3月3日に実施されました。願書の受付は、2月9日(火)・10日(水)・12日(金)の3日間で行われ、全日制募集人員30,920人にに対し33,627人の出願がありました。12日時点での志願倍率は1.09倍でした。入試の一本化により、この選抜が本年度入試の最初でありかつ最後となる関係で、志願又は希望の変更が2月17日(水)・18日(木)に受付され、最終の志願者数(確定志願者数)は、33,517人となりました。12日の時点より110人が志願を取り下げ、確定の志願倍率は1.08倍でした。前期・後期選抜と昨年度は入試制度が異なるため、単純な比較はできませんが、昨年度の前期志願者数と全体募集人員から割り出した志願倍率(1.13倍)と比較すると、大幅な志願倍率の低下となっています。志願者数を見ても、中学3年の在籍減を加味しても大幅な減少で、約3,000人の減少となりました。学区ごとでは、やはり都市部は比較的高く、第1学区(千葉市)、第2学区(船橋、市川、松戸他)、第3学区(柏、流山他)、第4学区(佐倉、四街道他)までは1.00倍を超えています。第5学区～第9学区については、軒並み1.00倍を割り込み、第7学区(茂原、いすみ他)が最も低く0.89倍となりました。高い倍率の目安となる1.50倍以上の学校・学科は、9校11学科に留まり、普通科で最も高かったのは東葛飾高校の1.82倍、専門学科では柏の葉高校の情報理数科で1.88倍でした。一方、大幅な志願者減からも推測できるように、1.00倍以下の学校・学科数は、73校110学科を数え、全体(126校203学科)の約6割が定員を満たさない志願結果となりました。これは、選抜制度が変わったと言え、間違いなく最も低調な志願状況と言えるのではないかと思います。そして、この状況は、実際の受検状況においても続き、多くの受検取り消しが見られました。入試本番までの長いブランクによるモチベーションの低下等、様々な理由による初日の欠席が199人、2日目は国立の木更津高専の合格発表の影響でさらに増え、受検取り消しは275人(追検査で8人受検、最終欠席者267人)となりました。合格発表後に二次募集を実施した学校・学科は、69校103学科に上り、募集人員は1,937人と昨年度より約1,000人の増加となりました。このような状況は、私の記憶上にはなく、間違いなく「最大の公立離れが生じた」と思います。

どうしてこのような状況になったのか? その要因として、いくつか挙げることができます。第一に、地方(都市部に対して)における募集人員が、その地域の中学3年生の在籍数と比較して多すぎることです。学区によっては、在籍数に対する募集人員の割合が95%以上になるところもあります。一方、都市部では、国の授業料支援制度等により私立志向がここ数年顕著となっており、それが公立離れの要因になっています。また、このコロナ禍の中での私立高校の対応が評価されたところもあります。そして、公立高校の入試一本化により、安全志向の高まり、あるいは私立入試と公立入試の大きなブランク(1か月以上の期間)の為に「早く進学先を決めたい」というあせりにも似た意識が大きな要因として働いたとも言えると思います。入試一本化の初年度、この要因が一番大きかったのではないかと思います。

令和3年度 一般入学者選抜(全日制の課程)	
実施学校・学科数	126校 203学科
募集人員	30,920人
志願者数	33,627人
志願の取消し	110人
確定志願者数	33,517人
確定志願倍率	1.08倍
受検の取消し(欠席)	267人
受検者数	33,250人
合格者数	
実質倍率	

各学区の確定志願倍率	
1学区	1.21倍(1.23倍)
2学区	1.13倍(1.19倍)
3学区	1.10倍(1.14倍)
4学区	1.03倍(1.16倍)
5学区	0.90倍(0.92倍)
6学区	0.91倍(0.94倍)
7学区	0.89倍(0.93倍)
8学区	0.92倍(0.78倍)
9学区	0.97倍(1.04倍)
全体	1.08倍(1.13倍)

* ()内は昨年度-全体の募集人員と前期志願者数で算出

各学区の概況

[1学区—千葉市]

昨年度は地域連携アクティブスクールの泉高校のみの定員減でしたが、今年度は7校7学科280人の大きな定員減となりました。千葉女子、千葉北、磯辺、柏井、土気、犢橋高校の各普通科、千葉工業高校の電気科が、各40人募集定員を減少させました。1学区に所在する高校の全日制の募集人員は6,080人となり、一般入学者選抜では7,353人が志願し、志願確定倍率は1.21倍となりました。選抜制度が異なるため単純な比較はできませんが、昨年度の倍率1.23倍（全体の募集人員と前期志願者数から算出）より若干下降した状況となりました。志願者数の減少は、上位校や中堅上位校の高校に多く見られる傾向がありました。県トップの県立千葉は、チャレンジ受検の減少等により、昨年度の前期志願者数より約70人志願者数を減らし、厳選された激戦となったと思います。2番手の千葉東の志願者数の減少は、県立千葉をさらに上回り、昨年度の前期志願者数より90人の減少、志願倍率は1.34倍まで下降しました。千葉東の志願状況は、ここ3年減少傾向にあります。市立千葉、市立稲毛高校の各学科は、昨年度との顕著な変化は見られませんでした。市立千葉の普通科の志願者数には若干の減少傾向、市立稲毛の普通科には増加傾向が見られます。その他上位校では、幕張総合の普通科は、志願者数の規模が大きいため目立ちませんが、約80人の減少、検見川高校については、約50人の減少が見られました。中堅校の千葉北高校は、40人の定員減にも関わらず、志願者数を伸ばし、ほぼ一昨年の志願状況まで回復しました。一方、同じ中堅校の千城台高校は、一昨年400人台あった志願者数を今年度は285人まで減らし、倍率も1.00倍を割り込み、0.89倍まで下降しました。下位校では、柏井高校の志願者増が顕著でした。昨年度を大きく上回る志願者数を確保し、定員減も重なり、厳しい入試となりました。また、専門学科では、千葉商業が約100人志願者を減少させ、志願倍率を大幅に下降させました（1.38倍→1.07倍）。

1学区は、上位校にやや変動が見られましたが、比較的安定した入試状況であったと思います。

[2学区—船橋・市川・松戸・習志野・八千代]

1学区同様、2学区も832人の中3在籍減（昨年度16,233人→15,401人）に伴い、13校の普通科で定員を減少させ（総計520人）、募集人員は9,200人となりました。9,200人の募集人員に対し、10,417人が志願し、志願確定倍率は1.13倍となりました。昨年度と比較してみると、大規模な定員減にも関わらず、志願倍率は1.19倍（全体の募集人員と前期志願者数から算出）から0.06ポイントの大幅な下降となりました。減少の傾向は、上位校から下位校まで万遍なく見られますが、減少の幅は、中堅校で大きく、上位校及び下位校では中堅校程大きくなかったように思います。大幅な志願者の減少を見せた中堅校は、津田沼、船橋芝山、船橋啓明、市立松戸、松戸六実の各普通科で、船橋啓明及び松戸六実が40人の定員減の警戒心から志願者数を減らしたと思われます。津田沼高校は、昨年度制服が新しくなり、およそ150人の志願者増を見ましたが、その反動での志願者減と思われます。また、市立松戸も一昨年のいわゆる「市松改革」で大幅な志願者増を見ましたが、ここ2年で志願者数は落ち着き、ほぼ以前の志願状況に戻った感があります。上位校に目を向けてみますと、県立船橋は、当初の志願倍率を1.88倍としていましたが、大幅な志願変更（40人）により、確定志願倍率は1.76倍に留まりました。県立千葉同様、チャレンジ受検の減少が主な理由だと思えます。低迷が続く薬園台は、例年とほとんど変化は見られず、このレベルの上位校としては緩やかな入試状況

2学区の定員減(各40人)	
学校名	学科名
八千代	普通
八千代東	普通
八千代西	普通
船橋啓明	普通
船橋二和	普通
船橋法典	普通
船橋豊富	普通
船橋北	普通
行徳	普通
浦安	普通
松戸国際	普通
松戸六実	普通
松戸向陽	普通
総計	520人

が続いています。対照的に近年人気が高く、進学実績も上昇している小金高校は、昨年度の前期選抜志願者数より約 50 人の減少で、緩やかではありますが志願者数の減少傾向が見られます。その他、船橋東、八千代、松戸国際あたりでも比較的顕著な志願の減少が見られましたが、唯一国府台高校だけは、約 80 人の志願者増で、不合格者約 120 人の厳しい入試となりました。下位校は、上位校や中堅校に比べ、大きな変動とはなりませんでしたが、近年人気が高かった地域連携アクティブスクールの船橋古和釜は、志願者数を昨年度の 357 人より 232 人に大幅に減らし（志願倍率 0.97 倍）、異常な入試状況となりました。逆に八千代西高校は、40 人の定員減にも関わらず、大幅な志願者増となりました。専門学科では、市立船橋の商業科及び市立松戸の国際人文科に比較的大きな志願者減がみられました。この 2 学区は、志願者数の 2 極化がはっきり見えており、中堅校から下の学校ではほぼ定員を満たさない状況となっています。

志願倍率が高かった学校・学科

学校名	学科名	倍率
柏の葉	情報理数	1.88 倍
東葛飾	普通	1.82 倍
県柏	理数	1.78 倍
県船橋	普通	1.76 倍
県船橋	理数	1.63 倍
柏の葉	普通	1.60 倍
津田沼	普通	1.58 倍
流山おおたかの森	国際コミュニケーション	1.53 倍
小金	総合学科	1.51 倍
県千葉	普通	1.50 倍
市千葉	理数	1.50 倍
県松戸	芸術	1.50 倍
佐倉	普通	1.50 倍

【3学区—柏・流山・野田・我孫子・鎌ヶ谷】

第3学区の定員減は、他の学区より少なく、3校3学科に留まりました。定員を減らしたのは、柏陵、柏中央、我孫子東の各普通科で、総計は120人の定員減でした。募集人員5,440人に対し、5,973人が志願し、志願倍率は1.10倍となりました。変動の大きい学校は多くはありませんでしたが、それぞれの学校が少しずつ減らし、トータル的には昨年度より0.04ポイント下降という状況になりました。最も変動した学校は、鎌ヶ谷高校です。鎌ヶ谷高校は、近年人気が高く、志願者数も500人を超える安定した入試を行っていましたが、今年度の志願者数は384人（志願変更前367人）で昨年度の前期志願者数より119人の減少となりました。理解に苦しむ志願状況です。東葛地区トップの東葛飾高校は、ほぼ昨年度の前期と同数の志願者数を確保し、県内の普通科ではトップの1.82倍を記録しました。一時陰りが見えましたが、近年では安定した高倍率となっています。2番手の県立柏は、極度に高い倍率こそ記録していませんが、非常に安定した入試状況で推移しています。生徒に人気が高いのは、柏南と柏の葉高校で、今年度も共に1.50倍を超える厳しい

入試となっています。また、柏の葉の情報理数科は、県内の専門学科で最も高い倍率1.88倍を記録しています。昨年度志願者を大きく減らした柏中央は、定員減、志願者増が重なり、倍率を昨年度より上げています。流山おおたかの森高校は、昨年度の前期志願者数を若干上回り、約90人の不合格者を出す比較的厳しい入試となりました。下位校では、市立柏、沼南高柳が比較的顕著な志願者減を示し、それぞれ0.76倍、0.80倍と定員を大きく割り込む状況となりました。専門学科では、県立柏の理数科が、志願者数を伸ばし1.78倍の高い倍率を示しました。流山及び清水の専門学科については、流山の商業・情報処理を除いて、志願者が伸びない苦しい入試となっています。

【4学区—佐倉・成田・四街道・八街・印西・白井・富里・印旛郡】

この地区の中学3年生の在籍減（約280名）から、今年度の募集人員は、富里、佐倉西の各普通科及び下総高校の園芸科で各40人減少し、総計3,160人になりました。この募集人員に対し、志願者数は3,258人で、確定志願倍率は1.03倍の結果となりました。昨年度の前期志願者数3,803人から約550人の大幅な志願者の減少で、最も減少の幅が大きい地区となりました。低調な志願結果は、上位層から下位層まで幅広く見られますが、特に減少の幅が大きかったのは成田国際の国際科でした。成田国際の国際科は、東京オリンピック開催決定の影響もあり、普通科と併せ近年非常に人気が高く厳しい入試状況が続いていました。昨年度の前期選抜も2.04倍の高い倍率を示していましたが、今年度は1.28倍に留まり、志願者数で約90人の大幅

な減少となりました。八幡川、平化、野上及び高田等小学校、佐原高等学校は、この地区トップ校の佐倉高校は、普通科、理数科ともに昨年度の前期選抜志願数をやや下回りましたが、普通科 1.50 倍、理数科 1.48 倍の厳しい入試が続いています。中堅校では、安定した入試状況が続いていた四街道高校の志願者減が顕著で、倍率が定員割れすれすれの 1.00 倍という近年にない状況となりました。この地区では、来年度佐倉南高校の三部制定時制高校への移行が予定されています。その為、全日制の佐倉南高校は募集停止となります。

[5 学区－香取・香取郡・銚子・旭・匝瑳]

低調な入試が続く学区で、今年度も志願者数は伸びませんでした。募集人員 1,960 人に対し、志願者数は 1,767 人で、志願倍率は 0.90 倍でした。3 校 3 学科、計 120 人の定員減を実施しましたが、ほぼ昨年度と同レベルの志願状況でした。佐原高校、市立銚子といったこの地区の上位校も、定員を満たすことができず、受検者がほぼ全員合格といった競争のない入試となりました。比較的安定した入試状況が続いていた佐原白楊も、今年度は約 40 人志願者を減らし、大規模な二次募集（募集人員 36 人）を実施しました。この地区で、志願者数が募集人員を超えた学校・学科は、東総工業の電子機械科（募集人員 40 人、志願者数 41 人）、匝瑳高校の普通科（募集人員 200 人、志願者数 206 人）のみで、ほとんど不合格者が出ない（不合格者は総計 9 人）という入試結果となりました。原因がどこにあるのかと考えた場合、やはり、その地区に在籍している中学 3 年生の数と高校の募集人員のバランスの悪さにあると考えられます。第 5 学区に所属している今年度の中学 3 年生は 1,995 人、募集人員は 1,960 人、ほぼ同数となっています。これでは、最初から定員を充足することはできない、ということはおそらくです。いろいろな問題はありますが、何らかの改善策が施されなければ、今後もこの状況は続いていくと思います。

[6 学区－東金・山武・大網白里・山武郡]

東金・山武地域では、全体として緩やかな状況が続いています。今年度は、成東高校の普通科、東金商業で各 40 人の定員減を実施し、募集人員 960 人、志願者数 875 人、志願倍率 0.91 倍という志願結果でした。この地区も大部分の学校・学科が定員を充足することができず、一段と低調な入試状況となっています。この地区のトップ校成東高校の普通科は、40 人の定員減で倍率を 1.14 倍までとしましたが、理数科は志願者が伸びず、1.03 倍（募集人員 40 人、志願者数 41 人）に留まりました。東金高校も、普通科、国際教養科ともに低調な入試結果で終わり、東金商業、九十九里高校では大規模な二次募集を実施しました。

[7 学区－茂原・長生郡・勝浦・いすみ・夷隅郡]

7 学区トップの長生の普通科では、昨年度の前期選抜で大幅な志願者の減少（約 100 人）を示し、実質定員割れの状況でした。今年度の志願者数は、やや回復し、志願倍率も 1.11 倍まで上昇しました。一方、理数科は、志願者が伸びず定員割れの状況で、普通科からの転科合格で定員を確保するという結果となりました。茂原高校は辛くも定員割れを免れましたが、その他の茂原樟陽の農業系・工業系の各学科、一宮商業、大多喜、大原高校は全て定員割れで、この学区全体の志願倍率は 0.89 倍と全ての学区の中で最も低いものとなりました。

[8 学区－館山・鴨川・南房総・安房郡]

募集人員 720 人、志願者数 662 人、志願倍率 0.92 倍と、今年度も緩やかな入試となりましたが、昨年度と比較して志願者数は伸びています（昨年度前期志願者数 590 人→今年度 662 人）。伝統校の安房高校は、志願者を少し伸ばし、志願倍率 1.07 倍の少数激戦となりました。安房高校以外の学校・学科全てで、二次募集を実施しています。

[9学区—木更津・君津・袖ヶ浦・富津・市原]

第9学区の定員減は、市原八幡高校のみでした。その市原八幡は、昨年の高倍率の影響もあり、昨年度の前期選抜志願者数より約80人と大幅に志願者数を減らしました。不合格者もごくわずかという近年では珍しい低倍率となりました。同じく志願者数を減らしたのは、袖ヶ浦の普通科、木更津東の普通・家政の両学科、京葉高校で、各学校・学科とも約50人の減少幅でした。この地区トップの木更津高校は、普通科・理数科ともに例年なみの志願者数を確保して、安定した入試状況が続いています。今年度の志願倍率は、普通科1.17倍、理数科1.33倍でした。一方、伝統校の君津高校は、志願者数の減少傾向が止まらず、定員割れが生じ二次募集を実施しました。9学区の全体の状況は、募集人員2,240人に対し、2,181人が志願し、志願倍率は0.97倍でした。

最後に

右の表からわかるように、二次募集の募集人員は、5年前に比べて5倍に膨れ上がっています。今年度は、

平成29年度	30年度	31年度	令和2年度	3年度
18校26学科 397人	27校39学科 651人	36校50学科 870人	37校54学科 927人	69校103学科 1,937人

1,937人、約2,000人となり、まさしく異常事態と言っていいのではないかと思います。平成29年度以前の入試では、都市部で二次募集を実施する学校はほとんど存在せず、中心はやはり地方の学校でした。しかしながら、今年度の状況を見ますと、地方の学校はやはり苦しい志願状況ですが、都市部の学校でも二次募集を実施せざる負えない状況になっており、その規模も大きく、二次募集の中心が都市部に移ってきたと言えます。今年度は1,480人の定員減を実施しましたが、来年度の中学3年生の在籍者数は、今年度に比較しておよそ1,200人増加します。通常ですと、在籍数が増加する都市部の学校を中心に、数百人の定員増が予想されます。このままの状況で、都市部の学校で定員増となれば、今年度以上の大規模な二次募集が実施されるのは明白です。そして、このような状況は、何ら良い影響や結果をもたらしません。競争のない状況が受験生に何をもたらすか。受験生にとっては悪影響そのものだと思います。本気になって、何らかの“公立離れをくい止める対策”を考えなければいけない状況だと感じます。

